



祝祭日には国旗を掲げましょう。

大阪天満宮社報

天満さん

令和五癸卯年
新春号外

年首御慶

祈

令和五年元旦 種治書



新春の祈り

謹んで令和五年の新年を言祝ぎ、皇室の弥栄と氏子崇敬者の皆様のご健勝を祈念申し上げます。

新年には初詣で多くの方々が「祈り」を込めて神前にお参りをされます。新しい年に当たり誓いを立て、様々な願いを神様に捧げ託します。生かされている今に感謝し、精一杯日々の生活に力を尽くす。そのような思いが新年の祈りであり我々が生きて行く上で大切な事だと思えます。

令和元年末から世界中に広まった新型コロナウイルスの影響により、当宮の祭儀や様々な行事が影響を受け、天神祭も令和二年以降、従来の形での斎行が出来ないままですが、昨年は人数を制限して何とか陸渡御を本来の形で行う事が出来ました。講社の皆様はじめ氏子の方々のお陰だと感謝しています。

願人が勇ましく太鼓を打ち鳴らし渡御の先頭に行く催太鼓、迫力のあるお囃子を奏で踊る天神講獅子の子供達、金色に輝く鳳神輿と玉神輿、境内に鳴り響く地車囃子と龍踊り。境内でのわずかな時間でしたが、それぞれの講社の晴れ姿を天神様にご覧いただく事が出来、宮司として大

大阪天満宮 宮司 寺井 種治

変嬉しく思いました。時期的に感染拡大が心配でしたが、対策をとって最大限出来る限りの天神祭であったと思います。

しかしながら、昨年も本来の天神祭の中心である船渡御と奉納花火は実施する事は出来ませんでした。これで三年間船渡御はなかった事になります。今現在どのような感染対策を取れば安全に実施出来るのか、講社や協賛会の方々と共に模索をしておりますが、今年こそはという思いは多くの方々と同じであります。

天神祭は古くから様々な困難を乗り越え、千年の歴史を今に刻んで参りました。戦乱や火事で何度も社殿を失い、また疫病や不景気などの影響で天神祭は中断を余儀なくされた時代もありましたが、その度に神社と氏子の方々が一丸となって乗り越えて来た歴史があります。

境内の北東に「舟渡御へ見せて浪速の土性骨」という歌碑があります。今こそ浪速の土性骨^{どしよぼね}と心意気で出来る事を最大限の努力と工夫をして行うという気持ちで、本年の天神祭に臨みたいと思います。皆様本年もどうぞ宜しくお願い申し上げます。

今年の干支 癸卯（みずのと・う）

昨年は「壬寅（みずのえ・とら）」の年でした。「壬」は責任を担う「任」に通じ、「寅」は人が手を合わせて約束することを示す象形文字で、「畏れ慎んで進む」という意味を持っていた。ですから「壬寅」の昨年は、恐れ慎みながらも、自らの任務を自覚して、責任を果たすべき年だったのです。

さて、今年は「癸卯（みずのと・う）」の年です。「癸」は「揆」に通じ、「測る（はかる）」という字義を持つとともに、「測る」ための正しい筋道をも意味していました。ですから、「揆を一にする」というのは、考え方の筋道を同じくすることを言うのです。ちなみに、百姓一揆などの「一揆」も、実は蜂起することを指すのではなく、一致団結することを意味していました。

もう一方の「卯」は、二本の縦線が門柱を表し、その両側が左右に開いた扉を示す象形文字です。そのため「卯」は、門を開くことによって、これまで手を付けていなかった新し

い分野にも取り組み、万物を繁茂させる意味を持つのです。

よって、「癸卯」の今年は、万事に正しく筋を通して、新たな分野でも繁栄に向かうべき年であることを示しているのです。門を開いた先に広がるアフターコロナの社会において、私たちがどのような正しい筋道を進むかが問われている年だともいえます。

（安岡正篤大人の著書から）
令和五年元旦 大阪天満宮



当宮の「天神画像」群 大阪市指定

有形文化財に指定

当宮では、御祭神の菅原道真公（天神様）を描いた「天神画像」を数多く所蔵していますが、昨年五月二十七日、これらの天神画像群が大阪市教育委員会によって「天神信仰関係画像史料一括（77点）」の名で市の有形文化財に指定されました。

今回の指定は、数ある画像のうちから文化的に価値の高いものだけを選びすぎるのではなく、所蔵の全てを「天神信仰関係」として一括の指定です。結果、中世に制作された絵画史的に価値の高い作品だけではなく、明治期に一般向けに販売された安価な木版画像も含まれています。御祭神の画像には優劣をつけず、全てを大切に保管してきたことが認められたものと喜んでいきます。

当社報では、平成九年十二月刊の第三十三号以降、隔号の表紙で天神画像を紹介し、大阪工業大学の松浦清先生に解説をご執筆いただいています。今回の指定を機に、所蔵の天神画像のうちから、数点をご紹介します。

◆「束帯天神像」と「渡唐天神像」

天神画像は、一般に「束帯天神像」と「渡唐天神像」に大別されます。

「束帯天神」は、平安貴族の正装「束帯」を着し、基本的に座像で描かれます。「束帯天神像」は、さらにいくつかに分類されます。

●怒り天神 冤罪で左遷されたため、眉をつり上げ、上歯で下唇を噛む憤怒の形相で、笏を右手で膝に押し付け怒りに耐えられている図1のような御姿を「怒り天神」といいます。

●白髪天神・水鏡天神 その怒りのあまり髪も髭も一夜にして白くなった様子を描くのが「白髪天神」、その憔悴したお姿を川面に映されているのが「水鏡天神」です。

●網敷天神 この他にも、左遷の途次に上陸し、船の艦綱を巻いて円座のように座られている「網敷天神」も「束帯天神」の一種です。

一方の「渡唐天神」は、天神様が日本海を渡り、中国（宋）の無準師範に禅を学ばれたという伝説によるもので、基本的に立像で描かれます。

●渡唐天神 図2のように、中国服を着て梅枝を持つのが基本形です。肩から掛けた腰の袈裟袋には、無準から与えられた衣が入っています。

◆「御生前の菅原道真公」
菅原道真公は、日本史上初めて実在の人間から神になられた存在です。そのため、御生前の様子を描いた肖像画も少なくありません。

●菅公恩賜御衣之図 図5は延喜元年（九〇一）、冤罪によって大宰権帥に左遷された菅公の同年九月十日夜の御姿を描いています。前年の同日に、

●文字絵渡唐天神 文字で描いた渡唐天神もあります。図3では、冠部を「天」で、右肩から左肩にかけては「神」の崩し字で描かれています。

●束帯・渡唐天神 「束帯天神」と「渡唐天神」の分類は、前者は「装束」、後者は「伝説」によるものから普遍的な分類とは言い難く、図4のように両分類に跨る図様も生まれます。束帯姿の立像ながら梅枝を持ち、上部の色紙には渡唐天神に由来する和歌が墨書されています。

宮中の残菊の宴で「秋思」の勅題に応えて漢詩を詠み、醍醐天皇から御衣を賜ったことを思い出され、その御衣を戴いていらつしやいます。

●砂浜の菅公像 図6は、海辺の岩

に腰掛けて、子どもに文字を教えらみえます。「大宰府」と書かれようれる菅公です。砂浜に「大」の字がとされているのでしょうか。

図1 室町時代



図2 室町時代



図3 桃山時代



図4 室町・桃山時代



図5 明治時代



図6 昭和三年



